



特定非営利活動法人 レスキューストックヤード

東日本大震災 被災者支援 2013 年度 活動報告書

未来へ

漕ぎ出す



Rescue Stock Yard 2013.4-2014.3

3年目の御礼と4年目の支援に向けて

レスキューストックヤード代表理事 栗田暢之



どこまでも突き抜ける青空に、それよりももっとブルーでキラキラと輝く海が全面に広がります。七ヶ浜町中央部の高台に、昨年7月にオープンさせた「きずな公園」からの風景です。しかし、視界には海岸線の道路をひっきりなしにダンプが走っているのが見え、都度、土煙が舞い上がるので、そのあたりは茶色く見えます。少し前までは、近くの空き地に津波で押し潰された錆色の車輛がうず高く積まれていましたが、今は片付けられました。

震災から3年が経過しました。今年度も当法人は多くの方々に支えられ、支援活動を継続することができました。ご支援・ご協力賜りました皆様に、まずもって心より御礼申し上げます。被災地では、高台移転等のための造成工事や防潮堤の嵩上げ工事など、本格的な復興に向けたハード整備が急ピッチで進められています。一方で、被災者一人ひとりの復興は全体として語ることはできません。四畳半二間の狭い仮設住宅

で耐え続けている家族、情報が滞りがちで不安な日々を送っているみなし仮設にお住まいの独居世帯の方、一部損壊の自宅を再建するも、ご近所さんが一律に戻ることもなく、さびしい思いをされている老夫婦…。お一人おひとりの復興は、いまだ途上の段階であり、階段の踊り場で待たされているような状態です。

このような現状の中であって、当法人としても放っておけません。今しばらく現地にスタッフを常駐させ、支援活動を継続していきたくと思っています。今だからできることはたくさんあります。引き続きのご理解とご協力をお願いします。

今日も「きずな公園」では、赤や黄、青、色とりどりの服を着た子どもたちが元気に遊び、満面の笑みから白い歯がこぼれ落ちそうです。散歩に出てきたおじいちゃん・おばあちゃんも、思わず笑みを浮かべます。人が海に負けないくらい、キラキラと輝く日を取り戻すことを心から願っています。

希望の光がさらに輝くように

レスキューストックヤード常務理事 浦野愛



「仮設を出て、新しい家に移転するって言っても、喜びや幸せをあまり感じてないの。あるのは、終の棲家で生活を維持するために、またこれからどれだけ頑張らなくてはならないのかという漠然とした不安」

車座トークで聞かれた住民の言葉でした。震災から3年が経ち、行政も高台移転地の整備や災害公営住宅建設計画を着々と進め、少しずつ先の見通しが立ちつつあります。しかしそれは、いよいよ逃れられない現実が目の前に突きつけられることでもあり、皆さんの複雑な心の内を浮き彫りにする言葉でもありました。

そんな苦しい状況の中で、子どもも大人も、お年寄りたちも、それぞれの形で「自分は七ヶ浜でこれからどう生きていくのか」を一生懸命に模索しています。互いに我慢を重ね、気遣い合い、折れそうになる気持ちを奮い立たせながらも、前に進もうとする姿を私たちはこの1年、そばで見続けてきました。

今、多くの方々が口をそろえるのは「これまで応援してくれた人たちや、今も自分たちを心配してくれる人のために、もうひと踏ん張りしたい」ということです。新しい家を建てたらボランティアさんと呼ばたい、七ヶ浜のうんめえものをたくさんの人に食べてほしい、毎日運動して移転後も元気に過ごしたい、震災の体験を他の人に伝えたい、何か人の役に立つことをしたい…。目標は一人ひとりそれぞれですが、そのことが生きる希望や意欲につながっています。

同様に、これまでRSYがつながってきた過去の被災地の方々や活動を共にしてきた多くの関係者からは「私たちにできることをもっと教えて!」という声もいただいています。

それぞれにちりばめられた希望の光が、互いの存在によってさらに輝けるよう、次の1年も皆さんと共に歩ませていただきたいと思います。

宮城県七ヶ浜町

七ヶ浜町は仙台市から15kmほど北東に位置する半島状の町。人口は約2万人、面積約13.3km²。

名前の通り「7つの浜」に囲まれ、漁業や観光が盛ん。「菖蒲田浜」は東北で最も古い海水浴場といわれ、家族連れをはじめサーフィンのメッカとして若者にも親しまれています。

昔ながらの漁師町のほか、仙台のベッドタウンとして新興住宅地も開発され、新旧の住民が入り交じった土地柄に。

スポーツ施設やホールが充実しており、外国人の避暑地だった歴史から造られた「国際村」では、地元の子どもたちを中心としたミュージカル劇団がつけられています。



震度5強の地震後、最大12.1mの大津波が襲来。菖蒲田地区を中心に沿岸の集落に壊滅的な被害
津波浸水面積4.8km²（町面積の36.4%）

死者105名、行方不明者2名、震災関連死3名

全壊674世帯、大規模半壊236世帯、半壊413世帯、一部損壊2600世帯の家屋被害

町内36カ所の避難所にピーク時で6,143人の町民が避難

町内6カ所の仮設住宅に354戸、829名が入居

みなし仮設*には181世帯、550名が入居

（2014年4月1日現在）

*みなし仮設：民間住宅を国や自治体が借り上げて、仮設住宅の代わりとして被災者に提供したり、公営住宅や雇用促進住宅、被災者が自力で借りた賃貸住宅も仮設住宅とみなしたりした住宅を総称して「みなし仮設」とし、家賃などを国が負担している。



七ヶ浜事務局 2013 年度の活動

- 2013 年 4/4 きずな公園づくりワークショップを開催
 4/17 ROAD情報交換会へ参加
 4/26 語り部勉強会へ協力
 5/3～5 ゴールデンウィーク企画サポータープロジェクト七ヶ浜セットの販売
 5/26 きずな公園看板づくりワークショップを開催
 6/15 ものづくり交流会 in 気仙沼へ参加
 7/7～8 安城市交流事業へ七ヶ浜住民 12 名が参加
 7/15 きずな公園オープニングセレモニー開催
 7/27 きずな工房夏休み子ども木工教室を開催
 7/27～28 海まつりを開催
 8/10 七ヶ浜町民夏まつりへ協力
 8/23 JCN現地会議 in 南三陸へ参加
 8/31 きずな公園モニュメントワークショップ7つのおうち作りを実施
 9/7 みなし仮設交流会を開催
 9/8 汐見台地区交流事業へ協力
 9/21 謡仮設集会所にてきずな工房ミニ木工教室を開催
 9/22 親子スマイルフェスタへ協力
 10/19 農地復旧感謝祭へ協力
 10/20 あさひ園まつりへ協力
 10/21 きずな公園の草刈りを実施
 10/23 子育て支援センター芋煮会へ協力
 11/6 野外活動センター仮設集会所にてきずな工房ミニ木工教室を開催
 11/16 七ヶ浜を食べよう復興ポッケ祭り 2013 を開催
 11/20 被災者が一番伝えたいことを次の被災者につなぐ事業第 1 回ワークショップを開催
 11/30 第 1 回きずな公園 DAY を開催
 12/2 第 1 回七ヶ浜町住民車座トークを開催
 12/13 被災者が一番伝えたいことを次の被災者につなぐ事業第 2 回ワークショップを開催
 12/20 子育て支援センタークリスマス会へ協力
 12/23 仮設店舗七の市商店街 2 周年イベントを開催
 12/24 サンタが家にやってくる 2013 を開催
- 2014 年 1/26 あそぶさございん七ヶ浜 de お正月へ協力
 2/11 ものづくり交流会 in 亶理へ参加
 2/17 第 2 回七ヶ浜町住民車座トークを開催
 2/18 JCN現地会議 in 東松島へ参加
 3/1～2 きずな工房 2 周年発表会を開催
 3/8 語り部研修会を実施
 3/11 七ヶ浜町慰霊祭へ参列
 3/15 3.11 メモリアル企画 UMITSUNAGU(う・み・つ・な・ぐ)～10 万人の七ヶ浜人と共に～開催
 3/23 被災者が一番伝えたいことを次の被災者につなぐ事業報告会を名古屋で実施
 3/28 第 2 回きずな公園 DAY を開催

七ヶ浜事務局 定期開催の活動

- 仮設店舗七の市商店街へのイベント応援・月1回
- 仮設住宅集会場にて足湯・月5回程度
- 花洲浜まじらん会送迎・月2回
- 復興支援調整実務者会議への参加・月2回
- きずな工房定例会議・月1回
- 七ヶ浜復興応援サポータープロジェクト運営会議・月1回



名古屋事務局 2013年度の活動

- 2013年 6/29～6/30 名古屋市「安全安心防災フェア」で、きずな工房商品・七ヶ浜町の物産販売
- 7/7 刈谷市「デンソーハートフルまつり」で、きずな工房商品・七ヶ浜町の物産販売
- 7/13～7/16 七ヶ浜町に向け、ボランティアバス62陣の運行
- 7/14 岐阜県下呂市「きもちいっぱいフェスティバル」で、きずな工房商品・七ヶ浜町の物産販売
- 8/30～9/1 名古屋市「みちのくフェスティバル」で、七ヶ浜町の物産販売
- 9/14 名古屋市「環境デーなごや」で、きずな工房商品・七ヶ浜町の物産販売
- 10/1 七ヶ浜町からの要請で、ペット用の支援物資を東海建設株式会社の倉庫より搬出
- 10/3 RSY事務局で県外避難者の集まり「第1回なごやかカフェ」を開催
- 11/8～11/9 名古屋市「商店街逸品名品販売会」で、きずな工房商品・七ヶ浜町の物産販売
- 11/11 名古屋事務局で「七ヶ浜を食べよう会」を開催
- 11/15～11/18 七ヶ浜町に向け、ボランティアバス63陣の運行
- 11/17 名古屋市「JCフェスティバル」で、きずな工房商品・七ヶ浜町の物産販売
- 11/21 名古屋事務局で県外避難者の集まり「第2回なごやかカフェ」を開催
- 12/20～12/24 七ヶ浜町・福島県会津美里町に向け、ボランティアバス64陣の運行
- 2014年 1/2 名古屋市熱田神宮にて、「初夢募金」と銘打ち街頭募金を開催
- 1/16 名古屋事務局で県外避難者の集まり「第3回 なごやかカフェ」を開催
- 1/26 名古屋市「ぼらチャリパーク」で、きずな工房商品の販売
- 2/23 名古屋市「防災フェスタ 2014 in みなみ」で、きずな工房商品・七ヶ浜町の物産販売、パネル展示
- 3/2 岐阜県瑞穂市「瑞穂福祉フェスティバル」で、東日本大震災支援のパネル展示
- 3/14～3/17 七ヶ浜町・福島県会津美里町に向け、ボランティアバス65陣の運行
- 3/21 RSY主催「ボランティア大交流会 2014」で、きずな工房商品・東北物産の販売
- 3/23 RSY主催「被災者が一番伝えたいことを次の被災者につなぐ事業」の報告会の開催

足湯ボランティア

住民とボランティアが一对一でゆっくりと会話を交わし、住民の声である「つぶやき」を聴く活動です。

話す内容は主に何気ない日常会話ですが、中には悩みやこの先の不安などを話される方も。それらをまとめ、専門機関などにつなげて個別化した課題を解決できることもあります。

実施回数は2011年3月から累計270回を超え、利用された住民は延べ3300名、活動したボランティアは延べ1700名。「足湯で来るボランティアさんと会うことが楽しみにしている」という声も少なくありません。現在もボランティアを募集しており、宮城県

内の大学生とも連携をしながら活動を続けています。



仮設店舗「七の市商店街」

2011年12月11日、七ヶ浜町生涯学習センター敷地内にオープンし、3年目を迎えた七の市商店街。月1回のミーティングやイベント運営、オリジナル商品である七ヶ浜町の食材を使った『七ヶ浜復興バーガー』や『七宝汁』の開発など「町の憩いの場所にしたいたい」、「七ヶ浜町が頑張っているところを見せたい」と

いう想いを形にしようと奮闘しています。

テレビ、ラジオの報道も多くなり、さまざまなイベント会場として町民にもなじみの場所になっています。町内外の企業や団体、ボランティアの方々から継続的な支援もあり、当法人も運営のサポートを続けています。



きずな工房

応急仮設住宅やみなし仮設住宅で、「裁縫も日曜大工も道具が津波で流された」「仮設にいても何もやることがない」という方々の集いの場や生きがいづくりを目的に2011年12月にオープン。毎日10名程度が集まり、木工部門ではテーブルや椅子、裁縫部門では巾着袋やエコバッグなどを制作し、町内外の様々な機会に販売しています。売り上げの一部は制作者に還元されると共に、購入者からお手紙をいただくなど、人のつながりも広がっています。



きずな公園

「震災後も安全に遊べる場所が欲しい」という母親の言葉がきっかけとなり、2013年7月15日にオープン。ブラザー工業(株)、(一社)名古屋建設業協会、生活協同組合連合会アイチョイス、国際ソロプチミスト名古屋、名古屋造形大学やさしい美術プロジェクトなどから支援をいただいて設置されました。

子どもを含め約30名の住民が参加したワークショップを経て、ボランティアと共に看板や椅子、復興モニュメントを作成し、園庭に設置。現在は定期的に清掃やイベントを開催され、賑わいの場となっています。



七ヶ浜町復興応援サポータープロジェクト

「ボランティアにとって七ヶ浜町を『被災地』ではなく『また訪れたい場所』にしてもらうため、内から外への情報発信をしよう」と、復興に携わる地元団体と連携し、2012年9月から始めました。「七ヶ浜の今を伝える」メールマガジン、ブログ、フェイスブ

ック、ツイッターを定期的に発信。メールマガジン登録者は2014年3月末現在で942名、フェイスブックの「いいね!」数も1058を超え、七ヶ浜町民の登録も増えています。年に数回の「ボランティアと町民をつなげる交流企画」も開催しています。



漁業支援

「海の町七ヶ浜の復興の象徴は漁業の再開。町の海産物を多くの人に食べてもらい、これまでの感謝と漁師の頑張りを見てほしい」



津波で家や船、漁具、生活の基盤のすべてを失いつつも、刺し網・素潜り漁を再開した2人の地元漁師が立ち上げた「七ヶ浜ぼっけ倶楽部七友会」の運営と産地直送の販売促進をサポート。2013年10月から七ヶ浜名物ぼっけ汁とワタリガニのセット、白魚と生わかめのセット、ワタリガニとアワビのセットを順次販売中。11月11日、名古屋事務所で「七ヶ浜を食べる会」を開き、会員やボランティア約20名が参加。「被災地を忘れない」「名古屋からも応援し続ける」機会となりました。現地では漁師とボランティアバスメンバーが直接触れ合う交流企画なども開いています。

教訓を残すヒアリング 被災者が一番伝えたいことを次の被災者につなぐ事業

「災害から大切な命を守るために、町の子どもたちや次の被災地のために私たちの体験を伝えたい」という町民の声がきっかけとなり、平成25年度日本郵便年賀寄付金助成を受けて実施。スタッフが半年をかけて約20名の町民に震災当時の体験談を聞きとり、「津波」「避難行動」「避難所生活」「仮設住宅」の場面に分類して冊子にまとめました。

3月23日には町民14名を名古屋に招き、名古屋国際センターを会場に成果報告会「防災フォーラム～被災者が一番伝えたいこと」を開催。七ヶ浜で活動した

ボランティアを中心に116名が参加し、あらためて被災地から学び、交流する機会となりました。



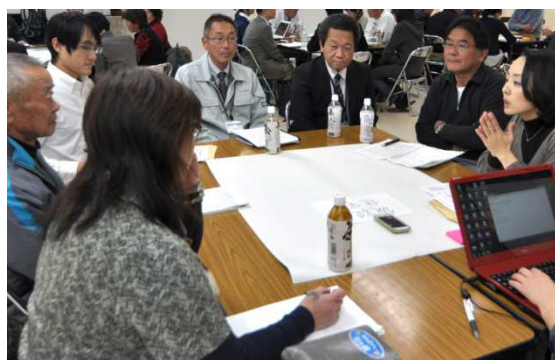
七ヶ浜町住民車座トーク

「災害ボランティア支援プロジェクト会議（支援P）」応援資金の助成を受け、高台や災害公営住宅への移転を前に住民が個別に抱える漠然とした不安や課題をはき出し、ともに解決策を考える場を設けました。

日本災害復興学会復興支援委員会との共催で、阪神・淡路大震災や新潟県中越地震等の復興支援経験のある有識者や支援団体スタッフが聞き手や情報提

供者としてサポート。

12月2日、2月17日の2回の開催を通じて、住民からは「誰に相談してよいか分からなかった」「解決できないとあきらめていた」「聴いてくれる人がほしかった」などの声が聞かれ、土地売買の課題を抱えていた住民を司法書士につなぎ、アドバイスを心得て問題解決につながった事例も生まれ、「今後も続けて開催してほしい」との要望も上がりました。



支援希望団体のコーディネート

震災から3年が経つ現在でも、七ヶ浜・名古屋事務局には、企業やボランティアグループから「何か力になれることはないか」という問い合わせや「地元での防災・減災のために被災者の体験を学ばせてほしい」という相談を受けています。

現地スタッフがこれまでに培った地元の方々との人脈を生かして、被災エリアの案内や語り部の紹介、仮設住宅の方々との交流の場を提供させていただいています。

ボランティアバスの派遣

2013年の東日本大震災直後から、生活協同組合連合会アイチョイスからの寄付助成を受け、ボランティアバスを定期的に運行しています。今年度は、計4回(7/13~16、11/15~18、12/20~24、3/14~17)運行し、名古屋から約60名のボランティアを送り出しました。

主な活動は、仮設住宅での足湯や住民(七の市商店街や地元漁師)主催のイベントの運営サポートです。

12月からは福島県会津美里町の宮里仮設住宅を訪れ、住民と交流しています。



RSY758 (ボランティアグループ)

RSY758は、東日本大震災のボランティア活動をきっかけに「被災地を思い続ける」「災害に負けない」「できることから行動しよう」をテーマに、RSYに関わるボランティアが結成したグループです。

支援をきっかけにつなげたボランティア同士の再会や新しい出会いの場となる「ボランティア大交

流会」を開催し、ワークショップなどを通して名古屋からできる支援を参加者とともに考えました。

各種イベントへ出展の際には、震災のパネル展示や物品販売など、震災を風化させないための活動にもボランティア一丸となり取り組んでいます。今後も被災地を思い続け、自分たちの地域でできる備えを考えていきます。



きずな工房製品の販売

安心安全防災フェア(6/29-30、オアシス 21)、金山テストマーケティング(11/8-9、金山駅南口)、名古屋青年会議所JCフェスティバル(11/17、久屋広場)などへのブース出店、企業の社内イベント、大学祭等で運営者をお願いして販売していただく形式を含め、年間16か所で販売の機会を得ました。

手作り品を通して「被災者の物語」を伝えることを意識しながら販売しました。七ヶ浜の物産を並行して販売したケースもあります。



復興応援イベントへの参加

みちのくフェスティバル（8/30-9/1、矢場公園）では、プロの飲食業者に交じって屋台売りに挑戦。

七の市商店街から仕入れた塩釜産、八戸産のイカ焼き、仮設住宅のお母さん手作りのキュウリの漬物を販売しました。



クリスマスカードプロジェクト



「現地に行きたいけど、なにかしたい」「思いだけでも…」と、ボランティアによる手作りのメッセージカードを7月のきずな公園オープニングセレモニー、12月の「サンタが家にやってくる」イベントに合わせ、七ヶ浜の子どもたちや仮設住宅の々に渡しました。2011年の「寒中見舞いプロジェクト」から始まり、「このメッセージカードでつながったボランティアと文通を続けている」という住民もいる企画です。

初夢募金

「年始に募金活動しませんか？ 震災を忘れないためにも続けることが大切」というボランティアの声に押され、昨年に続いて2014年1月2日に熱田神宮の街頭で「初夢募金」を行いました。

新年早々にもかかわらず16名で午前、午後の計4時間、声を出し、総額19万3220円の募金が集まりました。活動を通して大切に遣わせていただきます。



「今年も娘が行きたいと言ってくれたので参加しました」というボランティアもいました。

レインボープロジェクト

「できるだけ長く名古屋から被災地を応援したい」と、2012年3月から毎月7日を「七ヶ浜の日」として継続しているプロジェクト。

株山田組、(株)ナックプランニングの協力のもと、きずな工房の巾着袋やエコバッグ、携帯ストラップなどの手作り品を、中川区の洋菓子店「フィレンツェ」の洋菓子とセットにして毎月20セットを販売。売り上げの一部が工房の生産者に還元されています。



東日本大震災支援全国ネットワーク（JCN）

震災後、全国の災害支援関係のNPO、NGOなどが結成したネットワーク組織。現在は約800団体が参加、栗田が代表世話人として参画しています。

岩手、宮城、福島の前被災3県に3人の地域駐在員を置き地域の課題をリサーチ、毎回テーマを絞って計27回の「現地会議」を開催、団体間のつながりづくりを行ってきました。同時に関係省庁とのコミュニケーションを図り、現地の声を伝えています。

2012年6月からは名古屋を皮切りに「広域避難者支援ミーティング」を計14回開催。4年目は「Walk

with 東北」を合い言葉に、企業や団体、個人の活動に一体感を生み出し、「点を面にする」プロジェクトを展開します。



愛知県被災者支援センター

愛知県には2014年3月現在、510世帯、約1200名が県外避難されています。避難者一人ひとりに寄り添い、支援するため、県はRSYを含めた県内のNPO4団体にセンターの運営を委託してきました。

13年度は交流会を46回開催し、延べ約1000名が参加。交流会の報告や生活情報などは避難者も編集にかかわる「定期便」を発行。避難先の各市町村への訪

問や相談、高齢独居宅への戸別訪問や専門家の派遣、パーソナルサポートの体制づくりなどにも力を入れています。

震災から3年が経過し、避難元へ戻る決断、愛知県に骨を埋める決断、まだどうするか自分と対峙する…など選択はさまざまです。避難者一人ひとりの決断を尊重し、今後も支援を継続していきます。

東日本大震災支援ボランティアセンターなごや

名古屋市社会福祉協議会が主体となり、RSYや各区の災害ボランティアネットワークで構成するなごや防災ボラネットが協力して運営。市内に住む被災者やボランティア活動希望者などから、13年末までに延べ3737件の相談を受けました。

被災者同士の出会いと交流の場「お茶っこサロンなごや」は20回開催し、延べ270世帯、647名が参加。今後は個別支援（生活支援）に力を入れ、避難者にもお茶っこサロンの運営に参画していただくなどして、

引き続きニーズに合わせた支援を展開していきます。



災害ボランティア活動支援プロジェクト会議（支援P）

2005年から企業、NPO、社会福祉協議会、共同募金会等で構成されるネットワーク組織。

平常時には災害支援に関わる調査・研究、人材育成や啓発活動を行うとともに、災害時には多様な機関・

組織、関係者などが協働・協力して被災者支援にあっています。RSYでは同組織の応援資金から助成を受け、七ヶ浜町での車座トーク、メモリアル企画等を開催しています。



七ヶ浜町長 渡邊善夫

平成23年3月11日に発生した東日本大震災による大津波は、我が町にも容赦なく襲いかかり、町土の3分の1をも飲み込む大惨事をもたらしました。

R S Yの皆様には、震災直後から、避難所や仮設住宅集会所での足湯ボランティアをはじめ、菖蒲田浜海水浴場、農地などのガレキ撤去など数えきれないほどのご支援を賜りました。おかげさまで、昨年には、約3年ぶりに78ヘクタールの水田で実りの秋を迎えることができました。

今日、我が町が復興に向け力強く、着実に歩みを進めることができますのも、皆様をはじめ、延べ7

万人を超えるボランティアの皆様、国内外の多くの皆様から賜った温かいご支援があったからこそでございます。改めて、深く感謝申し上げます。

東日本大震災から3年。現在、町では、住宅再建に向けた事業が本格化しており、今年6月までは、5箇所の高台住宅団地のうち4箇所が竣工する予定であります。また、2月には新しい学校給食センターが完成し、七ヶ浜中学校の新校舎も2014年度末までには完成する見込みであります。

七ヶ浜の一日も早い復興に向け、町民一丸となって邁進してまいりますので、今後も皆様の変わらぬご理解とご協力をお願い申し上げます。



社会福祉法人七ヶ浜町社会福祉協議会会長 鎌田節夫

東日本大震災から3年が過ぎ、4年目を迎えました。発災から3日目の13日には先遣隊を派遣していただき、以来、多大なるご支援とご協力を賜りました。栗田代表理事はじめスタッフ、関係者の皆様方に心から感謝申し上げます。また、貴法人を通じて、物心両面に渡って、愛知県を中心に全国から数多くのご支援をいただきました。名前を挙げると枚挙にいとまがありません。この紙面を通じて、皆様方に心から感謝申し上げます。

国道も鉄道もない交通の不便な七ヶ浜町では、地

元の住民だけではこれだけ多くのボランティアさんにご支援をいただくことはできなかったのではないかと思います。漁師町という気質もあり、おいそれと「助けてほしい」とは言えない町民が、ときとともに貴法人の活動の温かさと寄り添ってくれるありがたさに気づき、自分自身の置かれている立場と、将来へ向けて顔をあげていかなければいけないと、私をはじめ思い始めたところです。

これからも私たちに寄り添い、七ヶ浜町の復興を見守っていただきたいと思っております。



仮設店舗「七の市商店街」代表 星仁

震災3年目を迎えましたが、その間大勢の方に物心両面にご支援を頂き、復旧できたことを心より感謝を申し上げます。お陰様で当七ヶ浜町は、災害公営住宅及び高台移転工事も着々と

進み、移転に向けて皆の心も準備中です。今後の復興は皆さまのより頂いたご芳志を無にすることなく努力を致してまいりますので、今後ともお見守り下さいます様、お願い申し上げます感謝の言葉と致します。



七ヶ浜町ぼっけ倶楽部七友会代表 鈴木直也

震災の中で学んだことはたくさんありますが、その中でも「人との出会い（縁）の大切さ」が一番感じました。自分だけでなく多くの住民が「人とのふれ合い」によって勇気づけられ、支えられてきたと思っております。これから3年経とうが10年

経とうが何事にも立ち向かう意思と感謝の気持ちを忘れず、歩み続けていきたいです。町はボランティアさんのおかげでキレイになりましたが、人の気持ちはまだ復興したとは言えません。みんなで前に進みましょう。一日でも早く普通の生活を取り戻すまで。



安城防災ネット 間瀬トシ子

2011年5月、ボラバス第6陣で初めて七ヶ浜での活動に参加。現地での活動に参加できない人たちも共にできる活動を探していたところ、RSYきずな館から「たべさいんグループ」を紹介していただき、安城の野菜を活動で使っていただい

たことから交流が始まりました。

12年度から安城市東日本大震災復興支援交流事業として助成を受け、七ヶ浜と安城を往来する交流事業を継続中。今後もRSYのご指導をいただきながら交流を深めたいです。ボラバスに感謝！



ボランティア代表 石原和義

災害ボランティア活動への参加は3・11から半年が過ぎたころでした。現地へ行って分かったのは、いろいろな役割があることでした。じゃあ、自分にできることは何か？ を考えたとき、地元名古屋からの後方支援でした。活動の拠点をR

SYに置いたのも、生活がベースで、時間の空いたときに参加できることが一番の条件でした。仕事から、物販の経験を活かし、各種イベントには積極的に参加しています。今後も地元名古屋からの後方支援の活動を継続していきます。



ブラザー工業(株)コーポレートコミュニケーション部 間瀬康文

震災直後、世界中のブラザー従業員から、義援金や手作りのバッグなどの支援物資が寄せられました。名古屋の企業にとって、これらを被災地の皆さんに届けることは簡単ではありませんでしたが、七ヶ浜町に事務所を構えるRSYのご協力によって、世界中の従業員からの善意を被災地の皆さんに届けることができました。これ以来、ブラザーはRSYとの信頼関係のもと、七ヶ浜町の支援活動を継続して実施しています。

「きずな公園」の完成イベントに、20名のブラザー従業員の一人として名古屋から参加しました。七ヶ浜町の住民の皆さんとの交流を通じて、継続的な支援活動の必要性をあらためて実感するとともに、RSYが行政や地域住民の皆さんとの間の、本当に強い信頼関係のもと活動を続けていることを知って大変な感銘を受けました。今後も現地に根ざした活動を進めていただきますことを期待しております。そしてブラザーグループもRSYと連携して継続的な支援活動を行ってまいります。

2013年7月、その義援金を使って建設される「き



一般社団法人名古屋建設業協会会長 山田厚志

今年も、忘れがたい「あの日」を迎えました。

あの日、遠く名古屋の地までも揺らした東北を襲った大震災は、穏やかな海に囲まれた七ヶ浜の暮らしを一変させてしまいました。そして、私たちが忘れかけていた人智では制御不能な大自然の巨大な力を、多くの尊い命が思い出させてくれました。そのことの意味の重さを、私たちは決して忘れてはならないし、できることから一つでも防災・減災の行動を始めなければならないと、「あの日」を迎えてあらためて強く思います。

私たち名古屋の建設分野の人間が取り組む行動が「命つながる街づくり」だとすれば、名古屋が誇るRSYの皆さんの日々の実践は「命つながる人づくり」です。被災されたかの地の人たちに手を差し伸べて、文字通り「命のつながり」の絆を太くします。

でも、それだけにはとどまりません。支援した皆さんもまた、被災地から得がたい学びを受け取って双方の命がつながっていくのだから、この活動はまさに「命つながる人づくり」にほかなりません。これからもそのつながりがより広く深くなっていくことを、私たちは心から願います。



生活協同組合連合会アイチョイス専務理事 大宮隆博

R S Yとは、19年前の阪神淡路大地震をきっかけに、東海豪雨、中越地震、能登半島沖地震と、この20年の間に日本列島を襲った大災害の度に一緒に被災地への支援をさせていただきました。

それでもこれまで経験したことのない、広範囲に渡り大きな被害を出した東日本大震災に際し、私たちは戸惑うばかりでしたが、R S Yの動きは迅速でした。いち早く被災地を回り、全国からの支援が始まる中で、目の行き届いていなかった七ヶ浜町への支援を素早く決断し、どんどん行動に移して行きました。いつもながら、的確な判断と迅速な行動力、そして人を巻き込み動かす力に感心するばかりです。

阪神淡路大地震からのお付き合いでR S Yに学んだことのひとつに、支援は一方通行ではいけないということです。マスコミが流す偏った情報に惑わされず、被災地に必要なものは何かを考え、現地からの情報ももらいながら支援物資を揃えることができたのもそのおかげです。5月には、生協の組合員に呼びかけ、生活支援のための鍋やフライパンなどの調理道具やカレンダーなどを提供してもらい、組合員のボランティアによって1世帯ごとのセットにして、仮設住宅入居者へ生活支援物資としてお届けすることができました。入居者の皆さんの喜ぶ顔に何かしらの役に立てたのかなと安堵の気持ちとともに、生協の理念である「一人は万人のために、万人は一人のために」をあらためて思い起こしながら、組合員への感謝と生協と

いう仕事に携われていることへの喜びも感じることもできました。

いつも被災された皆さんへ元気を届けたいと思い現地へ入るのですが、人生を大きく変える出来事の中、懸命に前に進もうとする人たちやそれを支えようとする人たちを前に、逆に元気や勇気をもらって帰ってきています。これも何かの縁。七ヶ浜町の人たちとこれからもつながって行けたらと思っています。

私たちは支援活動を通じて、多くのことを学ばせてもらい、自身の財産にもなっています。それは、関わった全ての人たちのおかげでもあります。生協連合会アイチョイスに集う、あいち生協とコープ自然派くらぶ生協の組合員の皆さん、いろいろご指導いただいた栗田代表理事はじめスタッフの皆さん、そして元気と勇気を頂いた七ヶ浜町の皆さんへこの場を借りて感謝申し上げます。

あれから3年経ちましたが、まだまだ復興への道のりには多くの課題を残しています。とりわけ福島第一原発事故による放射能汚染の問題はこれからも長い長い対応が必要です。東日本大震災支援に際し私たちが掲げた『想う 支える つながる』の合言葉に、もう一度思いを新たに共に進んで行くことを誓いながら、東日本大震災の記憶を風化させることなく、ささやかでも私たちに出来ることを継続し、被災地の復興、放射能汚染への対応、脱原発社会への一助になればと願います。



やさしい美術プロジェクト 高橋伸行

R S Yからモニュメント制作の相談があったとき、すぐに思い浮かんだのは、私たちがこれまで取り組んできた仮設住宅の表札作りや、仮設店舗の看板作りでした。

表札と看板には津波で流されたお宅の土台の木を活用しています。打ち砕かれた家は瓦礫などではなく、一つ一つが人々の暮らしを映した記憶のかけらです。それらを表札に組み入れて、地域住民とボランティアで作りました。私たちの役割は表札と看板

の続編を作ることはないかと考えました。

今回きずな公園に設置したモニュメント「おうちのおうち」の素材は、これまでと同様に津波で流されたお宅の柱や梁です。家型のフレームは記憶の住処を表現し、七ヶ浜町を象徴した7つの台座に据えてあります。また、色とりどりの家型ブロックは七ヶ浜町の住民や子どもたちが制作したものです。このモニュメントを眺めては築かれた「きずな」を思い起こしていただけたらと心から願っています。



東北学院大学災害ボランティアステーション学生代表 長島心一

東北学院大学災害ボランティアステーションは、2011年度からRSYを通して七ヶ浜町で活動させていただいています。そしてこれまで足湯ボランティアや子ども支援、地域イベントなどの際にRSYから声をかけられ、大変多くの活動機会を提供してもらいました。

被災地の大学として「何か仙台市近辺で活動することはできないか」。そんな思いで始めた七ヶ浜町の活動でしたが、今では弊団体に欠かすことのできない活動地域となっております。これもひとえにRSYのご協力のたまものと深く感謝しております。

震災から3年が経過し、宮城県内外問わず、震災の風化が進んでいます。しかし現場に足を運び、その住民とお話すると、まだまだできること、すべきことがあると分かります。

また、被災地は東北に限定されるものではなく、次の震災はどこで起こるかわかりません。東北の支援でとどまるのではなく、自身の地元にも今後は目を向けていくことが大切であると思います。

継続は力なりと言うように、地道で息の長い支援や活動を、今後もRSYと共に行わせていただければ幸いです。



国際ソロプチミスト名古屋2012年度会長 栗田恭子

2013年7月15日のきずな公園開園セレモニーに私ども国際ソロプチミスト名古屋が鉄棒とブランコを寄贈したご縁で出席させて頂きました。大変綺麗に整備された山の自然を活かした公園でしたが横には仮設住宅が並んでおり、まだまだ震災の傷

跡が残る象徴的な光景でした。しかし、子ども達が遊びに興ずる元気な声はこれからの七ヶ浜町の復興と日本の未来の礎を感じる希望に溢れるものであったと思いました。

この地を忘れず、学んでいく

レスキューストックヤード七ヶ浜スタッフ（～2013年度） 石井良規



2013年度は何かが大きく動いた年ではありませんでした。

3年が経ち、仮設住宅での生活も多少慣れましたが、生活の不便さは工夫による軽減はあれど、解消することはありません。本来、2年が期限の仮設住宅を使用し続ける弊害があらこちらに見られます。

高台住宅団地、災害公営住宅が建設されることを希望に感じながら、一方で家を再建することでさらに重ねることになる借金に将来の不安を感じたり、ようやく慣れた仮設住宅のご近所付き合いがまたバラバラになってしまうことに戸惑ったり、仮設住宅の中で引っ越しをしなければならなかったりする被災者もいるのが現状です。

こうした中で、震災直後から続けられる足湯ボランティアや毎月実施される仮設商店街での催しなど、今

でもボランティアが関わることのできる活動は続いています。東北の地へ行くことが難しい場合でも、きずな工房でお母さんたちが一つひとつ作った手作り品や、七ヶ浜のおいしい海の幸を届ける七友会の漁師セットなどを購入することで、地元から東北の応援をすることもできます。

風化が叫ばれる中、今でも顔を見せてくれるボランティアとの交流を楽しみに待っている仮設住宅のおじいちゃん、おばあちゃんや、ボランティアとのつながりを励みに新たな取り組みを進めていく若者も出てきています。

私たちはこの大災害を忘れず、今後発生する巨大地震にも備え、学んでいく姿勢で一人ひとりのできる形を探しながら今後も復興へと歩みを進める東北の応援をしていきたいと考えています。



特定非営利活動法人 レスキューストックヤード
東日本大震災 被災者支援
2013 年度 活動報告書 

2014 年 3 月 31 日発行

特定非営利活動法人レスキューストックヤード
名古屋事務所

〒461-0001 名古屋市東区泉 1-13-34 名建協 2 階

tel 052-253-7550

fax 052-253-7552

e-mail info@rsy-nagoya.com

web <http://rsy-nagoya.com/>

twitter rescuestockyard

facebook rsy.nagoya

七ヶ浜事務所

〒985-0802 宮城県宮城郡七ヶ浜町字吉田浜 5-9

老人福祉センター浜風

浜を元気に！七ヶ浜町復興支援ボランティアセンター内